

スモッグの季節

ならしまとしお＝作

西村繁男＝絵



ソグの季節

ならしまとしお＝作

西村繁男＝絵



JUNIOR LIBRARY

913／スモッグの季節

ならしま としお（檜島利雄）

理論社／1973年初版

214p／23cm／菊判

コード=8393-31341-8924

スモッグの季節

一九七四年 八月 第四刷 ©

作者 ならしま としお

画家 西村繁男

発行者 小宮山量平

発行所 株式会社 理論社

東京都新宿区若松町一〇四番地
電話（03）五七九一（代表）
振替 東京九五七三六番

もう、五年も前のことになるのですが、この作品をよせられた当座、これを、児童文学として出版することに、編集者としては、ためらいをおぼえたものです。しかし、ためらいのうちに過ぎてゆく月日は、しだいに、この作品の真価をみがきあげてくれるのでした。どうやら、日本の現実そのものが、この作品を土俵に呼びだすように傾いてきました。

この作品が書かれたころ、人びとはまだ、PCBだのオキシダントだのという通り魔のような恐怖について、ほとんど知りませんでした。けれど今では、全国各地の中学生たちが、あつという間に、目をやられ、ノドをやられるというようなニュースを積みかさねて、

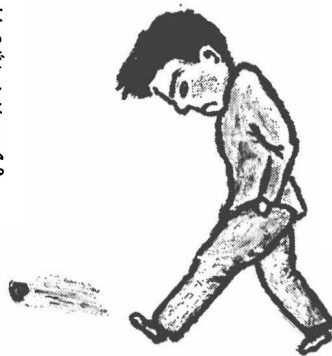
「日本列島」が地獄と化する方向への一日一日をみつめているのです。助けて下さい、なんとかして下さい……と、被害者の叫びをど

んなに叫んでみても、加害者の立場は、すこしもゆるがないことも、もう、じゅうぶんわかりました。少年少女たちは、「危ないから

気をつけてね!」と、毎日毎日声をかけられる年月をつうじて、どんな算数や国語よりも、日本のスモッグを見きわめることの大切さ

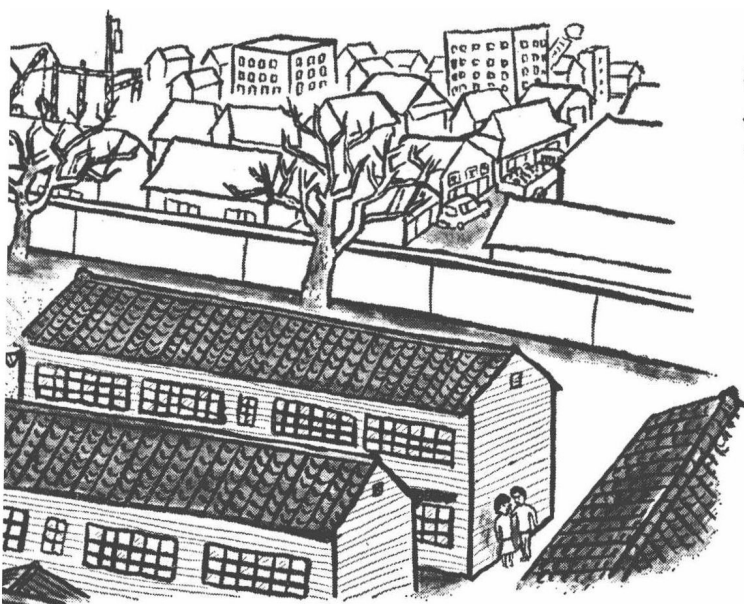
に目ざめようとしているのです。やがて少年少女たちは、自分の目と心で加害者たちを発見し、彼らを告発する人生をえらびぬけるようになるでしょうか。

おぞましいことに、日本のあらゆる公害産業は、今やグリーンと福祉の企業イメージのCMを開始しました。裸の王さまを「りっぱな服をお召しで」などと、ほめあげる家来がふえているのです。「王さまは裸だ!」と告発する心を、少年少女のものとするために、七十年代の児童文学は、何をなすべきでしょうか。日本の「スモッグの季節」に対する挑戦の試みの一つとして、この作品を、おとどけます。(ジュニア・ライブラリー編集部)

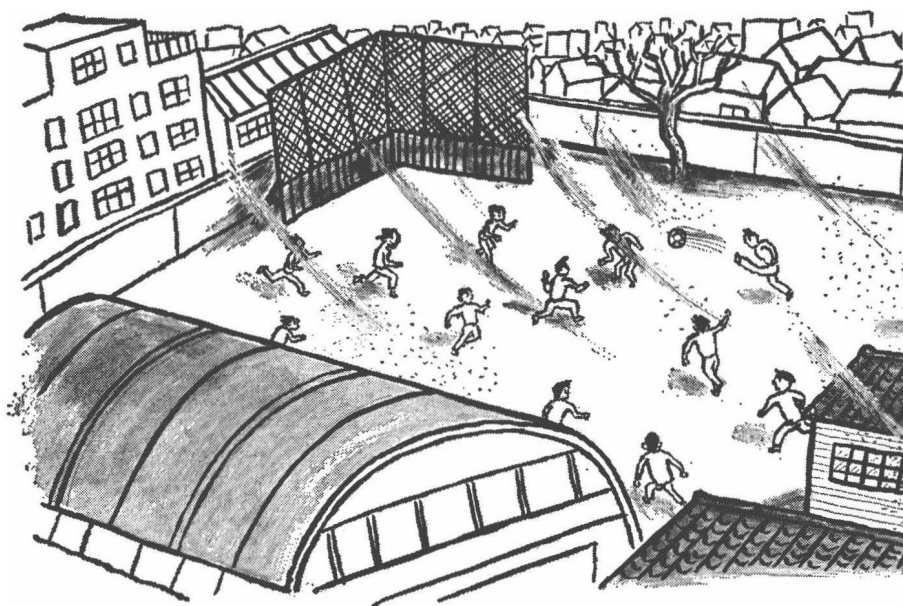


スモッグの季節

もくじ

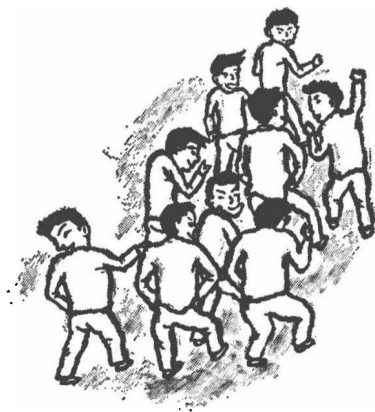


16	15	14	13	12	11	10	9	8	7	6	5	4	3	2	1
石ウス・メウス	パーティー券	アルバイト	宝のもちぐされ	班会議の司会	男生徒と女生徒の仲	鈴が森のさらし首	天狗山へ大脱走	一斉手入れ	ジョルジュ・サンドの国語	神聖会	預かりもの	サルの改革	ないものねだり	受けさせるだけは受けさせる	肩すかし
102	96	90	83	77	70	63	58	53	47	42	33	26	19	12	5



17	記録さえよければ きらく
18	シャモのけんか
19	暗闇にうかぶ邸宅 くらやみにうかぶていたく
20	真相報告集会 しんそう
21	中学三年生
22	警察の〈保護〉 ほご
23	労働者
24	おスタあねご
25	暴力追放 ぼうりよくついほう
26	眠っている子を起こすな きようはく
27	脅迫という名のラブレター
28	駅伝大会の日
29	生徒会臨時総会 りんじそうかい
30	真昼の火事 まひる
31	めぐりあい
	あとがき

212	204	199	191	183	178	169	161	155	150	141	134	128	121	114	108
-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----



西村 繁 男

そうてい・さしえ

肩すかし

「ひき殺されてエのか、このガキ！」

たたきつけて来た大声にとびのくと、うしろからもダンブカー。

「ぼっかやろう！ ブレイキがわりにアクセルなんか踏みやがって！」

ぼくもやり返してやった。と、こんどは横から、おこり病みみたいなブルドーザーが震えながらおどり立つように押して来た。

中学の通りは今、土の下から泥をあばき出す工事がくりひろげられていて足の踏み場もないありさまだ。



〈東京オリンピック〉に間に合わせるんだという話だ。

朝っぱらからどなられてしまって、ぼくはつばをべっと電柱に吐きつけ、泥んこの道を必死に向こう岸へ逃げようとした。足場の石がとつぜん崩れた。おどろいて飛びのくと、目の前のぼっかり開いたたて穴の底から、

「氣イつけろい！ 石くれなんか落っこしやがって、穴ん中の者を殺す気かァ！」

「……………」

「目玉をどこへくつつけて歩いてるんだよォ！」

「あ、だから、すまねエって言ったじゃねエか！」

「なんだとオ？」

「くやしかったら、上がって来て話しなよ」

ぼくはめんどうだから肩のカバンを横抱きに一目散にかけ出し、中学の校門からとびこんで、そこでやつとほっとした。

〈区立世田中学校〉——これがぼくの学校なのだ。

太平洋戦争に日本が敗れたあとのこと、広い広い砲兵隊練兵場の跡地に、当時まだ東京じゅうが焼け野原だったなかに、この中学校が建って、それからもう二十年にもなるということだけれど、校舎はまだバラックで三棟に分かれている。三棟の二階建て校舎をまん中へんで細長い渡り廊下が串ざしにしたようにつないでいる。焼きとりの串ざしによく似ている。

中学は女子大と広い運動場をへだてて隣り合い、万年塀でしきられた向こう側の建物は、女子大の瀟洒な白い四階建ての寮だ。そっちから吹いて来る西風に、運動場の砂ぼこりが巻き上げられると、黒くくすんだ三棟の串ざし校舎めがけて砂煙はのし上がるように空からかぶさって来て、中学は一日中はこりの渦の下で目もあいていられない。

白亜の女子大と隣同士では、あんまり差が目立ちすぎて、

恥ずかしくなる。

冬先の空はどんよりにごっている。

ぼくは教室へとびこんでいった。

二年A組のぼくらの班の連中は、もう二人来ていた。映画教室のあとの感想をまとめて発表する当番に班が当たっていたのだ。

ぼくもさっそくガリ切りにかかった。

——イギリスの大きな都会で、化粧品のセールスマンをして妻と子を養っていたジョン・カミングスは、月賦で買ったばかりの車を盗まれてしまったため、売り上げが減るばかりか、会社をクビになりました。

ぼくの馴れない鉄筆が、ガリガリ音を立てながら原紙の一ます一ますに字を埋めていく。マーちゃんの書いた原稿の字はきれいで、文もすっきりしている。マーちゃんの書いた原稿、マーちゃんの書いた原稿……と思いがら、ぼくはガリガリ原紙を切っていく。

——その時の、彼の仲間の取った態度について、私たち

の班はまず考えてみました。同じ職場の仲間たちの、あのうすきみ悪い笑いかた。きっと彼らの本心が一度に顔にあらわれたのです。「それは困ったな」と、口先ではいくらか同情らしいことを言っていたけれど、「自分の利益のほうがこれでふえるぞ」と、内心はほくそえんでいる顔でした。仲間が失敗するほど成績を計算できる職場。

やっているうちに班員みんなそろった。班長のおかよ、マーちゃん、おキン、あきこ、そして宣宏、貞二、ぼくと七人。まだ授業がはじまるまでには時間がある。

——それでは、ジョン・カミングスのほうには欠点はなかったでしょうか。あります。自分の売り上げだけにこだわっていて、やはり仲間のうえを考えるゆとりがありませんでした。自分の力だけに頼ろうとして、友達を作ろうとはしませんでした。もし彼に、友人がいたならば、あれほどまでにひどい目に会わないでもすんだろう、と思います。なぜ、ジョン・カミングスはある命がけに追いこまれたのでしょうか。なぜ彼らには、友人ができなかったのでしょうか。ああいう、セールスマンとい

う、競争のはげしい職場では、友人をつくっている暇というものがなかったということもありますが、いっしょに仕事をしている者どうしがみんな敵になるという「しくみ」について考えないと、それは、それは……

「あ、いけねえ、調子に乗り過ぎるとすぐこれだ。修正液……修正液を貸してくれよ」

ぼくは手を出して、グルリッと見回した。来たやつ来たやつ教室へカバンを置くと外へ出ていって、教室には、ぼくらの班だけがめいめい下を向いて鉄筆をガリガリ動かししている。朝めしがわりに宣宏はパンをモグモグやりながら原紙を切っている。

「ほいよ。消してばかりいると、謄写版にかけた時よく出ないぜ。原紙をクチャクチャにしないようにな」

「わかってるよ。原稿さえきれいならなァ、こうは失敗しねえんだけどなァ」

いったい誰が書いたんだっけ……と、知ってるくせにわざとおどけて言っつて、ぼくは、マーちゃんが横から「まあ！」と声をあげるのをみて、あわててまた机にこごむ。机にこごんだまま、声だけであとの話がやりとりされる。

「いくど同じこというの、いやね、オンちゃんたら」と、マーちゃんのうらむ声。

なんどでもぼくは、その人の声で自分の名まえが呼ばれるのを聞きたいんだ。いったいいつからそうなったのか、少しもはつきりしないけど、そうなのだ。なにしろぼくは、マーちゃんと同じ生活班になったことを、どんなに腹の底からうれしく思っているか知れないのだ。マーちゃんは、もう涼しい顔をして仕事をしてる。笑われながらも、ぼくはうれしい。

「でも変わったわね。正直言って、以前のオンちゃんには、こわくてあたしたち、こんな口きけなかったもんネ」

「すぐ人をぶったもんネ。ダイナマイトのそばにいたみたいで、やたら破裂して……」

「おいおい、ふざけるない。ダイナマイトはひどいよ」

「だってほんとだもの」

みんなまた笑った。

「あしたの発表に間に合うのかしらね。こんどの映画教室では、みんな勝手がちがったようネ。『食いついたら放すな』なんて、題名からしてショックよネ。ほかのクラスの人たちも話がたくさん出すぎちゃって、まとめるのに困っ

てるみたいネ。こういう時スカッと整理してくれる人のいるあたしたちの班、最高ネ」

おかよがまんまるい顔を上げてニコリ片目をつぶってみせた。

「私は誰でしょう」——テレビ番組の口調のまねだ。

「さあ、誰でしょう」

「まあまあ、わからない、マーマー、でしょ」

言ってみんなで笑い崩れる。言われた当のマーちゃんは相変わらず静かに目だけで笑っている。彫ったような唇がニコリはこるびるのを、ぼくはじっと横目で盗み見るよりしかたがない。

ガリを切る音がまたひとしきりして、朝礼のはじまるベルがやがて鳴った。

休み時間も休み時間もガリ切りは続き、昼になった。ぼくらはわき目もふらず仕事を進め、昼食もそこそこにして完成へと急いだ。膳写版にかけて刷る原紙の第一号めができ上がったとき、

「おい、ちょっと、来てくれよ」

いきなり肩をたたかれたので、鉄筆を握っていたぼくの手が前へすべって、原紙をしわにして突きささった。

「なにしゃがるんでェ！」

舞い散りそうになった原稿をあわてて押さえてぼくは荒っぽくふり返った。コートンの三角形をした顔がおどおどしながらなお力んでいた。

「ちよっと来いってよォ」コートンはくどくまた言った。

——ふん、つかいによこされたんだな。

「だれが！」

「メンチが、おめえを、呼んでるんだよ」

仕事をしていた班員の顔が一斉に上がる。うしろに、いっしょに来ていたボチの握りこぶしをうかがいながら、ぼくはびくっとした下から、へなにもビクつくことなんかないんだぞ。ぼくの今やっていることはまちがいないんだと、しきりに自分へ言いきかせた。目にはいつて来るボチの拳の指の爪にまっ黒いものがたまっている。

「どこへサ」

「こいつ、しらばつくれるつもりかよ」

廊下に来ていたんだ、メンチのやつ、ぬっとはいって来て、言いざま前の机をけとばした。すねの長い足のつま先の一撃に机がガタガタひっくり返った。子分ザルのコートン、ボチ、カメレオンたち六、七人が、またごていねいに

も真似をして、思い思いに机をけとばし、強がった。しかたのねえやつらだ。

「どこへでも案内しなよ、行つてやらあ」

ぼくは立ち上がった。ガヤガヤうるさい女子の声をうしろに聞きながら、廊下にとび出すと、メンチを取りまく一隊が先に立って廊下をかけぬけていく。遅れまいと、ぼくもかまわずふっとんでいった。廊下から階段、下駄箱、昇降口と、あたりに遊んでる連中に情容赦もなく片っぱしから当て身をくらわすようにして道を空けさせ、運動場へ出た。全校生徒千人の群れが、冬のにぶい陽ざしのなかで光って動くと、西風が時どき土煙を上げて襲いかかるから、しばらくは校庭の人影一斉に動きをやめ目をつむって、じっと立って、砂埃が耳元をザラザラかすめていく音を聞いてなければならぬ。隙を見つけてまた一斉に動き出す。ぼくも風を横目で警戒しながら運動場をつきつていき体育館裏へとびこんだ。

じめじめしたその細長い日陰をヒンヤリ万年堀が仕切っていて、堀の外は学校の敷地の外だ。けれど堀の一角所が二メートル幅にぶち抜かれ、ぶちぬかれたコンクリの残骸にふみくだかれて、ちゃんとした通路の通路になつてい

た。くぐり抜けていくと、女子大裏のちょっとした袋小路の別天地になっている。女子大の白い四階建ての寮の屋上に白い敷布が二、三枚干してあり、ふりかえると体育館の向こうからのぞく中学の三棟の校舎が、割れたガラス窓を点々とさらし、寒さむと砂煙を受けてたたずんでいる。女子大のブロック塀と会計検査院の高い塀にはさまれた四メートル幅の袋小路は公務員住宅の塀がふさいだ行きどまりで、誰も通らないから枯れかかった草が伸びて、そこまでは町の音も学校のざわめきも届かず、いやにしんとしている。

先頭に立っていたメンチのノッポのからだがくるつと振り返り、そこでぼくと向かい合った。まわりをグルッと、メンチボールの子分たちが取り囲んでしまっていた。

「なんだてめえ、このごろ先公のお先棒なんかかつぎやがって」と、メンチがいった。

「よォ、『ボスザル』たアいったい誰のことだ？　人をなめるつもりかってんだよ」

「へああそのことか、やつぱりな」

「お先棒かつぎは、おもしれエかって聞いているんだ」

「誰が先公のお先棒なんかかつぐもんか。当たり前えのこ

とを当たり前えに書いたまでのことじゃねエか。それがお先棒ってんなら、どういふことだか言ってみな。説明できたらやってみな」

「ああ、いくらでも言ってみな。自分だけいい子になりたくたって、どうせ高校へも行けねエようじゃ勉強だって人気だつてすっかり下火になって、女子にだってちつとももてやしねエやな。おめえ、火事場どろぼうみてエなことしやがって卑怯じゃねエか。人の弱身を洗いざらい根も葉もねエことまで書きやがって。でも、もともとおめえがまじめなやつだったというんならわかりもするけど、なんだい、今までさんざん与太りやがって、人をいじめほうだいいじめたくせに、今さらあんなくだらねエ作文を書くから、先公が文集なんぞへのつけて、二年生じゅうに読まれて、おまけに家のやつらにまで見られちまって、こっちはおかげでいい赤っ恥ヨ。よくもオイラの顔つぶしやがったナ、このカタを、どうつけてくれるんだ、って聞いているんだ、このお先棒のおべっかやろう！」

メンチの舌はよく回り、人の先回り先回りをしやがる。先公のお先棒だのおべっかなんぞとアタマに来ることばかり。ぼくがグッとつまったとき、一段と大きくあげたメ

ンチの声がとんで来た。

「タイチで片アつけようぜ！」

一対一でやるのがタイチなのだ。だしぬけに頬げたに火のようなゲンコが走って来た。ぼくは不覚にもよろけてしまった。立ちなおるひまもあればこそ、ワンスーの直撃をバッチリ見舞われ、うめいてしまった。うっかりだった。畜生！やるか！やるんなら徹底的にやろうじゃねえか！と歯をくいしばって立ち直り、両脚ふんばり両の拳を顔の前にかまえ拳闘の姿勢を取った。が、拳の上から相手をうかがうとメンチのやろう、しゃあしゃあとおつばを吐いて、「勝負はもうあったんだぜ、なあみんな！」

「完全だサ！」

まわりじゅうから八人の子分ザルどもがえらそうに口裏合わせて、パツとかけ出し帰っていつてしまった。

ああ遅かった、うかつだった。

張り合いぬけして、ぼくはボカンと見送るほかなかったのだ。じっさいやったらメンチなんぞに負けやしなかったのだ。結局おしまいを肩すかしで幕にされてしまって、ぼくは、こんなにいつまでも痛みの残るゲンコッなんか、今までに一度だってくらったことがなかっただけにくやし

った。

唇の切れたことなんかじゃなくて、ホームルームの議論や文集のことを女子大裏なんぞに持って来て一撃の肩すかしでカタをつけるようなマネに訴えたメンチの卑怯がくやしかったのだ。おまけにそんな卑怯におめおめやられて、一方的に惨敗してしまった不覚が、どうしても忘れられないのだ。道ばたの石つころにひっかかった紙つきれみたいに北風に吹かれてとんじまいそんな自分の軽つばしさが情なかった。

うす寒くどんよりした冬空に運動場のどよめきが反響して、それがわあんといつまでもぼくをあざ笑っている。町の空にアドバルーンがかたむいて、てっぺんのしぼんだ風船が今にもだらしなくおっこちそうだ。

口の中がドロツとあったかいので、ベツとおつばを吐いたら、黒っぽく酸っぱい血のかたまりがブロック塀へとんでいつてはりついた。ぼくはもう一度口をしぼり、生臭いおつばを吐いた。そして足もとのジャリにへばりついた自分の血のかたまりを、またいで歩き出すよりほかしかたなかった。

借りはきくと返してやる！

受けさせるだけは 受けさせる

運動場は潮のひくように静まった。始まったらしいけど、授業なんか出たくなかった。ぼくがおめおめ教室へもどっていけば、いじわるいたくさんの目が待ってるだろう。メンチをはじめコータン、カメレオン、ポチたちの袖ひき合ってコソコソあざ笑う顔。ほかのやつらの横目でみる目。唇をこんなにぶかっこうに腫れ上げさせたまんまじゃ、人目のあるところはみつともない。とても教室の女子の前へなぞ、ふがいなくて出られたもんじゃない。マーちゃんのことなど思いたくない。

といって、家へ帰ったって、家じゅう仕事に出てるからどうせ留守でカギがかかっている。授業ははじまっているだろう。ぼくは塀の陰から出ていけない。

しばらくは、袋小路の奥に一本だけ立っている青桐の幹に、意味もない石つころを拾って、はたきつけはたきつけしていたが、霜柱が溶けてぬかる日陰道を、モグモグ唇を気にしながら、ぼくは学校と反対方角の路地のほうへと歩き出した。

表通りへ出たとたん、角の交番のおまわりが、ジロジロこちをうかがった。不愉快なその視線を横つらに感じながらぼくは急に歯が痛いんだという顔をして、頬をゆがめ歯の間から空気をシーシー吸い取る音を立てながら、急ぎ歯医者へいかなくちや……と、無理に受け流して通り過ぎていった。

東京じゅうどこまでいっても、へオリンピックが荒らし



つづけている。

ほじくり返された土の山、ぶちまけられた鉄屑の山、そのあいだを唸りまくるダンプやブル……埃にむせて歩いていくと変なおいのガスが目にも鼻にもしみて来て、息苦しくなる。東京じゅうがオイラをじゃまにしやがって、まるでこれでは砂漠じゃねェか。

渋谷のデパートの屋上へのぼった。

屋上から見おろすと、こまかい屋根がいっぱい見えた。よくもまあこんなにかまかい屋根の家ばかり集まったものだ、おどろいた。東京の街は、通りに面した屋並みだけがいちおう体裁をつくらってきれいに見えるだけで、そのすぐ裏につづく屋根は全部貧弱でよごれきっている。東京は、ほんとうはゴミゴミしたきたくないところなんだ。恥だらけなんだ。よれよれなんだ。よれよれの帯みたいな通りが伸びて、そのまん中をノロノロと茶褐色の電車がっぱいの自動車に囲まれ押し合いへし合い、地面にへばりついて歩いている。通りの果ての遠い先の白い塔のある大きな建物、あれが女子大だ。手まえの白いしゃれた四角な建物、あれが寮だ。そのすぐ隣の運動場はさんで並んだくすんだ三棟、あれがぼくらの中学校なのだ。

見れば見るほど見すばらしく、ふんづけられたような校舎。あの中でぼくらは、雨の日は天井からポタポタ落ちて来る雨もりに教科書をよごし、風の日は破れ窓から吹っこむ砂煙の砂にノートのページをザラザラにし、天井裏のダニが吹き落とされて袴首からやたらこぼれこみ、あっちでもこっちでもポリポリ、掻いたあとをおデキにして、しやうがねエナアといい合ってる。

先公はそれをそうつと人ごとのような、また人ごとでないような顔で眺めてるんだ。学校の先生って、上から下まで、どうしてああぼくら生徒をそうつと見るんだ？ ひそめたような目で、そうつとしか見られない。口をきくのもそうつとで、変にいていねいでうすきみわるい。「東京山の手の中学校」か——へん、言えたガラかよ。おそるおそるひとの顔をながめたがる先公たちなんぞに、ぼくらのきもちがわかってたまるもんかってんだ。

いまごろメンチどもはいばりくさって、教室でさわぎまわっているだろう。アリみたいに机にへばりつき、うごめいているんだろう。へん、くそくらえてんだ。袋小路の肩すかしなんて、今この屋上から見ると、ばかばかしいうそっぱちほどにも思えやしない……。

ぼくはデパートからの帰りしな、三階売り場でちょっとばかり高級なライターを三こ、ポケットに失敬して来た。

その晩さっそく、担任の黒さんがぼくのところへ押しかけて来た。

「相談したいことがあるんだ」

それ来たと、ぼくは思った。

けんかのことかな、授業サボったことか、デパートのライターのことかな。あのライターなら、もう家へ帰るまえに警察署裏へひっこした中学OBのナマズの家へ寄って、彼に「いい売れ口を探してくれ」って頼んじゃったから、そこは安全、いまぼくを調べたって手元に証拠なんかありやしない。

それとも、売り場にいた監視員から手元を見られてしまったのかな。いやそんなことがあるものか。もし見られてれば、現行犯でことでバクられてるはずのもんだ。ポチみたいなかまはしやしない。これでもぼくは、これまで六、七回失敬してるが、ただの一ぺんだってデパートでつかまった経歴なんか持ってやしないんだ。

黒さんは、いやに悠々と息をして、タバコの煙をふうっと戸口で吹いている。人が来るたび気がひけてならない玄

関の引き戸を、ガタビシさせてうしろ手に閉めたところで、つつ立ったまんま黒さんは、狭く苦しいへやのどのへんへ掛けたいものかと目ではかるようにしながら、いかれた黒ギャバジンの上着のポケットに片手をつっこんで、いつまでもにやにやしている。

いきなり「相談がある」などといい出されたものだから、さて何をいい出すのかと、おやじもおふくろも姉三人も、一斉に自分の場所から黒さんの顔を見上げたまま、待つかつこうを取ったのだけど、結局いい出さないので、やっと気づいて、

「まあ、どうぞ」

と、おやじとおふくろが改まってお辞儀に移り、姉たち三人がかりで一枚の座ぶとんを探し出して来て、畳の端っこに据え、黒さんを迎えたのだ。

いまさらあわてふためいたって、畳も座ぶとんも手垢でかてか、出したお茶の湯気がまん中から細ぼそ立ちのぼる湯のみのへりは欠けていても、今すぐなおしようなんだから、もてなしようもないはずだ。

でも、きたない座ぶとんにいちいち目をかけず、平然と黒さんは尻の下へ敷きこんだので、ぼくは内心ほっとした。